

# 宗教と寛容（三）

## —— 宗教の真理と宗教者の態度 ——

小 畑 進（東京基督教大学非常勤講師）

### 第3章 佛教における《非寛容》

- (1) 蓮如の本願寺教団の実態 ……………（前号）
- (2) 日蓮の「四箇格言」 ……………（前号）
- (3) 「わが佛尊し」の系譜 …………… 1
  - (a) 佛教經典の自画自賛
  - (b) 最澄の『法華經』最勝論
  - (c) 空海の《密教》究竟論
  - (d) 親鸞・道元・日蓮など

#### (3) 「わが佛尊し」の系譜

##### (a) 佛教經典の自画自賛

すでに、先の日蓮の「四箇格言」によっても、佛教が、ただ言われるごとく、寛容融和の感傷的なもの・軟弱なものではないことがわかるのですが、もっと佛教の根源にさかのぼって、ひとたび大乘經典を披見してみれば、おのれのみ「唯一の真正の宗教であり、諸宗教の一つではない。他はことごとく贗物であり他の宗教の超越者に対する関係の仕方はあやまりである」というメロディーが、高らかに聞こえてくるのです。すなわち、諸經はおのれこそ最勝第一の佛教なりと自画自賛おこたりないのです。まずは『法華經』の場合、

譬えば一切の川流・江河の諸水の中にて、海はこれ第一なるが如く、この法華経もまた、かくの如く諸の如来の所説の経の中において、最もこれ深大なり。又、土山・黒山・小鉄山・大鉄圍山及び十宝山の衆山の中にて、須弥山はこれ第一なるが如く、この法華経もまた、かくの如く、諸経の中において、最もこれその上なり。又、衆星の中にて、月天子は最もこれ第一なるが如く、この法華経もまた、かくの如し、千万億種の諸の経法の中において最もこれ照明なるなり。<sup>(27)</sup>

云々と。以下、延々たる自讃の連続なのです。同じく代表的大乗經典たる『涅槃経』の場合、

展転薄淡にして気味有ること無し。気味なしと雖もなお余経に勝り、超逾すること千倍なり、彼の乳味の諸の苦味に於て其の勝ること千倍なるが如し。何を以ての故に。是の大乗典涅槃経は声聞経に於て最も上首と為す。譬えば牛乳の味中に最勝なるが如し。是の義を以ての故に大涅槃と名く。<sup>(28)</sup>

あるいは、また次のごとくなります。

所説の種々の妙法、秘密深奥蔵門、悉く皆此の大般涅槃に入る。此の故に名けて大般涅槃と為す。善男子、譬へば農夫春月に種を下し、常に希望有り。既に果実を収むれば、衆望都て息むが如し。善男子、一切衆生もまた是の如し。余経を修学すれば、常に滋味を希ふ。若し是の大般涅槃を聞くことを得ば、余経所有の滋味を希望する、悉く皆永く断ず。是の大涅槃は能く衆生をして諸の有流を度せしむ。…諸経

---

(27) 「法華経」薬王菩薩本事品第二十三。(岩波文庫版下・196頁)

(28) 「大般涅槃経」菩薩品第十六の二。(国訳大蔵経「大般涅槃経」第一・236頁)

中の勝なり。善男子、諸葉の中に醍醐<sup>だいご</sup>第一なるが如し。善く衆生の熱惱乱心を治す。是の大涅槃を最も第一とす。<sup>(29)</sup>

云々と、これまた延々と自讃がつづけられるのです。

(b) 最澄の『法華経』最勝論

経典にしてかくのごとくですから、諸僧は最勝第一と自称する諸経典を目の前にして、どれが本当の最勝第一かと選択・論証に奔走し、日本では伝教大師最澄が中国の天台大師智顛<sup>ちぎ</sup>の五時八教の教相判釈に基づいて法華経を最勝第一とし、日本天台宗を開宗して、在来の奈良佛教を一蹴。法華一乗<sup>きし</sup>の旗幟をひるがえして、論敵たる法相教学の大家・徳一を、一々「麤食者」、つまりお粗末な食いかけ者、あるいは「短翮者」、つまり羽が短くてヨチヨチ歩き<sup>べっしょう</sup>の未熟者と蔑称し、みずからも南都の僧綱<sup>そうごう</sup>たちから「東土に巧言秃頭沙門出でて、世間を誑惑す」とののしられながら、秋霜烈日の筆舌をもって駁撃しました。彼が法華経をもって第一とするがゆえです。

最澄聞く、南天の竜樹は八不を織りて邪を破し、東印の馬鳴は一心を立て、道を開く。護法は頌を釈して悪取空を断じ、青辯は論を作りて有所得を遮す。天親は論を製して五の過失を洗ひ、堅慧は論を作りて一究竟を顕はす。大乘論は即ち無著の顕揚、小乗論は即ち衆賢の顕宗なり。邪を破し世を顕すこと、車に載するに勝へず。<sup>(30)</sup>

(上顕戒論表)

これは、かまえた南都の学僧たちが浴せる弾劾告発に対する駁論『顕

(29) 「大般涅槃經」菩薩品第六の一。(国訳大藏経「大般涅槃經」第一・82頁)

(30) 「上顕戒論表」高僧名著全集・伝教大師篇(平凡社)173頁。

戒論三卷』に付した上表文の一節で、これらインド、中国の諸師の拳に  
な<sup>ら</sup>つて、破邪顕正の論を奉り、法華一乗の精華なることを吐露したも  
のです。ともかくも、空海には書冊の貸与を断られ、愛弟子泰範すら空  
海に奪われるなど、翼をもがれ、折られながらも当時の日本全佛教を相  
手に戦って、倒れて行った最澄の姿は「理論的闘争家の寂寞たる一面」<sup>(31)</sup>  
をも想起せしめてくれるのです。こうした「わが宗旨貴し」とする最澄  
の闘争的態度は、単に見にくいといったような閑文学で云々されましょ  
うか。私にはそうは思われません。重要なのはその主張の真偽なのであ  
り、その熱心にあられた彼の真剣さは尊敬すべきものなのです。

(c) 空海の《密教》究竟論

一方、弘法大師・空海の方は、最澄に比して、包容性ないし政治性・  
社交性に富む多芸多才の大天才であり、在来の奈良佛教とは円満なる交  
流をなして行くのですが、いざ、その教学を開けて見ると、こは如何に、  
おのが招来し来った真言密教こそ最勝第一なりとするものなのです。人  
間の住心（宗教意識）を十段階に分け示し、在来の佛教各宗をこの十段  
階に当てて、おのが密教を断然第一等最勝のものとして組織するのです。や  
はり、「わが佛貴し」なのです。しかも、いかなる低次のものも、この組  
織神学に組みこまれることによって、大日如来の最高の叡智を目ざすも  
のとして包摂されるのですが、これがまたそうすることによって、いつ  
のまにか真言密教は、いやがうえにも諸宗・諸法の上に君臨し、聳え立  
つ仕組になっていたのです。すなわち、第一異生羝羊心<sup>いしゅうでいようしん</sup>（雄羊のごとく  
食欲と性欲のみですごしている倫理以前の段階）から第九極無自性心<sup>ごくむじしやうしん</sup>  
（華嚴経が説く一即多，多即一の対立を超えた大乘の境地）までの間に、  
無宗教から在来の佛教各宗を組み入れて、その最上位に第十秘密莊嚴心<sup>ひみつしやうごんしん</sup>  
として、その真言密教を君臨せしめるのです。

---

(31) 三枝博音著「日本の思想文化」（第一書房）194頁。

九種の住心は自性なし、転深転妙にしてみなこれ因なり。真言密教は法身の説、秘密金剛は最勝の真なり<sup>(32)</sup>（『秘蔵宝鑰』）。

という風に。以上九種の段階、最澄の天台宗も、東大寺の華嚴宗も実はみな塵を払うだけで、わが真言密教のみ庫の扉を開く。わが真言秘密金剛の教えこそ最極究竟の真理なり、として、それこそ玉城氏の鬻蹙を買ったドイツの一老神父の言い分、「佛教はほんのわずかの真理をあらわしている。キリスト教は全面的に真理をあらわしている」というメロディーが、ここにも聞こえてはいませんか。ともかくも南都を制圧していた、かの法相宗などは第六住心に組み入れられ、三論宗は第七住心、対抗者たる最澄の天台宗も第八住心に、東大寺の華嚴宗は、それでも第九住心にと、階級・階段式に順序排列されて、一目瞭然、空海の真言宗に従属せしめられているのです。見事な編成・体制化と言わねばなりません。

いや、空海は佛教内部における自宗高揚のみか、その『三教指帰』においては外に向って儒教の代表「亀毛先生」、道教の「虚亡隠士」を、佛教の「仮名乞児」に、からみ合わせて、儒・道二教に対する佛教の最高の真理たることをも弁証していたのです。すなわち、儒教の亀毛先生も道家の虚亡隠士も佛家なる仮名乞児の前に席を避けて降参し、

彼の周孔、老莊の教え何ぞ其れ偏膚なるや。<sup>(33)</sup>

つまり孔子の儒教や老子の道教の教えはなんと浅薄なものであったとか、と、告白させられるのであり、これに対して佛教の仮名乞児は

(32) 「秘蔵宝鑰」弘法大師著作全集第一卷（山喜房）196頁。

(33) 「三教指帰」佛教文学集（筑摩書房）56頁。

綱常こじょうは孔に因って述べ受け習うて槐林かいりんに入る。変転たんこうは聃公の授け、依り伝えて道観りきいに臨む。金仙の一乗の法は義益最も幽深なり。自・他兼ねて利済す。<sup>(34)</sup>

すなわち、孔子は人倫道徳を説き、それを習った者は大臣にもなれよう。老子は陰陽変化を教え、その伝授によって道教の高樓にも登れよう。しかし、金仙つまり佛陀の唯一の真理こそは意義もっとも幽深であり、自と他をあわせて救済するものであると、宣して終るのです。

竹山氏は、これらのことについては一言ももらしてはおられないのですが、これをしも、「我が佛貴し」式の、おのれのみ唯一・真正の宗教なりとする態度として、キリスト教と同様に弾劾されるのでしょうか。いや、そうしたら、折角、志しておられる日本礼讃論は瓦壊してしまうのですが。けれども、私はここでも竹山氏と違って、ここに彼空海の真理への情熱をこそ見たいのであり、彼が最澄の懇請にもかかわらず、密教関係書冊の貸与を退け、泰範をおのが陣営に属せしめて、その交友を断つにいたったことも、無情・悲情の仕業と評者は申しませんが、その信ずるところ、真言密教をもって最高最勝とする自負・自信のあらわれだと申すべきでしょう。

(d) 親鸞・道元・日蓮など

このことは、おのが息子・善鸞を義絶した親鸞の仕打ち、弟子・玄明を放逐してその坐の床下三尺土を掘捨した道元の所行にもあてはまることで、いずれも、ただに評論家風の美感や常識を越えた宗教家の火の玉のような求道心、伝道心、真理に対する生命がけの信仰のあらわれだったのです。見にくいのが、不人情だのと言う閑文学は、評論家のサロンの標準でこそあれ、彼ら信仰者たちの基準ではなかったのです。おまけに

---

(34) (33)と同書同頁。

再び日蓮の一文を引用しておきましょう。これは先の空海とは逆に、天台法華出身の日蓮らしく、真言宗をもふくめて各宗を虚説・妄語なりと断じてやりかえしているのです。

法華経は実語の中の実語なり。真実の中の真実なり。真言宗と華嚴宗と三論と法相と俱舎・成実と律宗と念佛宗と禪宗等は、実語の中の妄語より立出せる宗々なり。法華経は、此等の宗々にはなるべくもなき実語なり。法華経の実語なるのみならず、一代妄語の経々すら法華経の大海に入ぬれば、法華経の御力にせめられて実語となり候。いわうや、法華経の題目をや。<sup>(35)</sup>

そして次の言葉は、いかがでしょう。

天台宗より外の諸宗は本尊にまどえり。俱舎・成実・律宗は、三十四心断結成道の积尊を本尊とせり。天尊の太子、迷惑して我身は民の子とをもうがごとし。華嚴宗・真言宗は、积尊を下て、盧舍那・大日等を本尊と定。天子たる父を下て、種姓もなき者、法王のごとくなるにつけり。浄土宗は、积迦の分身の阿弥陀佛を有縁の佛とをもて教主とすてたり。禪宗は、下賤の者、一分の徳あつて父母をさぐるがごとし。佛をさげ経を下。此皆、本尊に迷。例せば、三皇已前に父をしらず、人皆、禽獸に同ぜしがごとし。寿量品をしらざる諸宗の者、蓄同、不知恩の者なり<sup>(36)</sup>（『開目鈔』）。

正に明朗なる。“我が佛貴し”の宣言です。すでに内教においてかくの如しですから、まして外教に対してをや、です。すなわち彼日蓮は儒

(35) 「妙法尼御前御書御返事」、日蓮文集（岩波文庫）120頁。

(36) 「開目鈔」日蓮文集（岩波文庫）251-252頁。

教・外道を批判して次の如く断じます。

外典外道の四聖三仙，其の名は聖なりといえども，實には三惑末断の凡夫，其の名賢なりといえども，實に因果を辨ざる事嬰児のごとし。彼を船として，生死の大海をわたるべしや。彼を橋として，六道の巷こえがたし（開目鈔）<sup>(37)</sup>

親鸞また，阿弥陀佛を，「佛光照曜最第一」，「道光明朗超絶」，「神力無極」なる「無等々」，「無上尊」，「無称佛」，「無極尊」と唱えて，次のごとく讚美します。

神力無極の阿弥陀は，無量の諸佛ほめたまふ。東方恆沙の佛国より無数の菩薩ゆきたまふ。自余の九方の佛国も菩薩の往観みなおなじ。釈迦牟尼如来偈をときて，無量の功德をほめたまふ。十方の無量菩薩衆，徳本うゑんためにとて，恭敬をいたし歌嘆す。……十方三世の無量慧，おなじく一如に乗じてぞ，二智円満道平等，摂化随縁不思議なり。弥陀の浄土に帰しぬれば，すなわち諸佛に帰するなり。一心をもちて一佛を，ほむるは無礙人をほむるなり<sup>(38)</sup>

あるいはまた，本願寺教団の安泰をはかりつつ，足下の門徒たちの一揆騒動の火を消すべく，しきりに社寺に恭順の意を表すかのような蓮如にしても，たとえば，「神社を軽しむことあるべからず」としながら，

一切の神明と申すは本地の佛菩薩の変化にてましませども，この界の衆生をみるに佛菩薩にはすこし近づき難く，思ふ間神明の方便にか

---

(37) (36)と同書 207頁。

(38) 「讚阿弥陀佛偈和讚」 島地篇「真宗聖典」(明治書院) 148-151頁。

りに神と表はれて、衆生に縁を結びてその力を以て頼りとし、遂ひに佛法に勤め入れんがためなり。是即ち和光同塵けちえんは結縁のはじめ八相成道は利物の終りといへるは、この心なり。されば今の世の衆生、佛法を信じ、念佛を申さん人をば、神明あながは強ちに我が本意おほしめと思召すべし、この故に弥陀一佛の悲願に帰すればとりわけ神明をあがめず信ぜねども、そのうちに同じく信ずる心は籠こもれる故なり。<sup>(39)</sup>

神明つまり神道は本地たる佛菩薩が仮りに方便としてあらわれたものであると本地垂迹ほんちすいじやくの格づけをおこない、弥陀一佛の悲願に帰すれば格別に神明をあがめず信ぜずともよしとしておりますし、次に「諸佛菩薩並びに諸堂を軽しむべからず」とはしながら、

諸佛菩薩と申すは神明の本地なればいまの時の衆生は阿弥陀如来を信じ念佛申せば一切の諸佛菩薩は我が本師阿弥陀如来を信ずるにそのいはれあるに依りて、我が本懐と思召すが故に別して諸佛をとりわけ信ぜねども、阿弥陀佛一佛を信じ奉るうちに一切の諸佛も菩薩も、みな悉く籠れるが故に唯阿弥陀如来を、一心一向に懸命すれば、一切の諸佛も弥陀一体に帰せずといふことなきいはれなればと知るべし<sup>(40)</sup>

つまり、阿弥陀如来以外の一切の諸佛菩薩は、みな我が本師阿弥陀如来を信ずることにいわれがあるのであるから、とりわけて信ずる必要はない。阿弥陀如来一佛には一切諸佛の智慧も功德も帰して十分なのだと主張しているのです。

ともかくも、おのが宗教的立場こそ唯一真正の宗教であり、他は仮りの方便説、あるいは虚説、妄語であると言った立場—「立場」と言うよう

(39) 「五帖御文」六ヶ條掟文。高僧名著全集。法然篇（平凡社）56頁。

(40) 同上同頁。

な理論的なものと言うよりも竹山氏の場合は、むしろ「態度」といった方がよさそうです—を忌み嫌われるのですが、その傾向は、実は佛教内にも、日本の佛教史にも歴然と見られるところなのであって、何もキリスト教に限ったものではなかったのです。それを、前者には触れずに蓋をして、後者のみあげつらうのは、どうしてなのかと、首をかしげたくなるのです。真宗の一向一揆にかみあった既存佛教の意地悪と断圧。法然の浄土宗と親鸞の浄土真宗との角逐<sup>かくちく</sup>。悟りすましたはずの臨濟禪宗と曹洞宗との事々の張り合い等を知る者は、日本の宗教の名を借りて、キリスト教界内部のあれこれを高所から云々する資格ありやと、疑惑を抱かせられねばならないことです。それこそ、佛陀の言葉、「世間で人が勝れているとみなすものを『最上のもの』と考えて、諸々の見解にとどこおり、それよりも他のものはすべて『劣っている』と説く。それ故にかれは諸々の論争を超えることがない。」(七九六)。「かれは見たこと。学んだこと、戒律や道徳・思索したことについて、自身のうちにすぐれた実りを見、それだけを執著して、それ以外の他のものをすべて劣ったものであると見なす。」(七九七)、「ひとが或るものに依拠してその他のものは劣ったものであると見なすならば、そのものは実にこだわりである、と真理に達した人々は語る。それ故に修行僧は、見たこと・学んだこと・思案したこと、または戒律や道徳に依拠してはならない」(七九八)とか、「或る人々が『最上のもの』だと称する教えを、他の人々は『賤劣なもの』であると称する。これらのうちでどれが真実の説であるのか？かれらはすべて自分らこそ真理に達した者であると称しているのであるが。—」(九〇三)、「かれらは自分の教えを完全であると称し、他人の教えを賤劣であるという。かれらはこのように互いに異なった執見をいだいて論争し、めいめい自分の仮説を真理であると説く」(九〇四)、「もしも他人に非難されているが故に賤劣なのであるというならば、諸々の教えのうちで勝れたものは一つもないことになろう。けだし世人はみな自己の説を堅く主張して、他人の教えを劣ったものだと説いているからで

ある。」(九〇五)<sup>(41)</sup>と言った言葉の前に照らされる時、竜樹も最澄も空海も法然も日蓮も、どうなるのでしょうか。

しかしながら、重ねて誤解ないようにしていただきたいことは、私は、日本人の、あるいは佛教のあれこれを暴露することによって、それをもってキリスト教のあれこれの免罪符にしようなどとは毛頭思っていないことであり、かつまたあとでも見るように、むしろ自己の立場を宣揚するこれら諸師の志を、別の角度から評価しようとする者なのです。ともかくも、今日、安易に流行している外国・外教を誹謗することによって、自国・内教を賞揚すると言った、外剛内柔の甘えた日本人の感傷を告発したいと思うのです。わが母国貴し風の尊皇攘夷流や、後向きの内緒話、自慰的民族礼讃論ほど、物事の本質を見あやまらせること甚しいものはないからです。

---

(41) 「ブツダのこことば」— sutta-nipāta — (中村元訳・岩波文庫) pp. 149, 150, 165.